

サウジ皇太子COP26欠席の背景

新たな気候変動対策を打ち出したサウジだが、先進国との温度差は依然大きい。

さらに、ムハンマド皇太子に対する米国の不信感もあり、COP26では存在感を示せなかった。サウジの気候変動対策イニシアティブは継続するか。

サウジアラビアのムハンマド・ビン・サルマン皇太子は今年三月、サウジ・グリーン・イニシアティブと中東グリーン・イニシアティブという独自の気候変動対策を発表した。これらは、再生可能エネルギーの大量導入により同国の発電部門で消費されている石油を節約すること、また周辺国と合わせて五〇〇億本の植林を行うことを柱としていた。

そして国連気候変動枠組条約第二六回締約国会議（COP26）の直前の一〇月二三日・二五日に両イニシアティブに関する国際会議を開催し、気候変動対策において中東諸国をリードしようとした。そしてこれらの会議での成果を携えて、一〇月三十一日から開催されるCOP26にムハンマド皇太子自身が参加し、国際社会に対してその取り組みを

日本エネルギー経済研究所
中東研究センター主任研究員

近藤重人

こんどう しげと 慶應義塾大学大学院法学研究科後期博士課程修了。サウード国王大学（サウジアラビア）客員研究員。博士（法学）。専門はサウジアラビアを中心とした中東情勢分析。

アピールする予定であった。事前にCOP26事務局が作成した参加者リストにもその名が記されていた。しかし、皇太子は結局COP26に姿を現さなかった。

ムハンマド皇太子がCOP26を欠席した理由としては、次の二つを指摘できる。第一に、サウジアラビアと同様、欧州を中心とした急進的な気候変動対策に懐疑的な立場を取ってきた中国やロシアの首脳が同会議を欠席することが明らかになったことである。中国やロシアの首脳が不在のなか、先進国並みの目標までは掲げていないサウジアラビアのイニシアティブが歓迎されない公算が高まっていた。サウジアラビアは確かにグリーン・イニシアティブを掲げたものの、より強力な気候変動対策を求める者から見れ

ば、その内容はまだ不十分なものであった。例えば、同国は中国やロシアと同じ二〇六〇年の温室効果ガス排出量のネットゼロを掲げたが、これは二〇五〇年のネットゼロを掲げた欧州、日本、アラブ首長国連邦（UAE）などから見れば遅い目標であった。もちろんネットゼロ目標を掲げていなかった時点に比べれば大きな進展であったが、主催国の英国をはじめとして二〇五〇年目標を掲げる国が多く参加する中で、取り立ててサウジの取り組みが評価されない恐れがあった。

バイデン大統領への接近はかなわず

ムハンマド皇太子が欠席した第二の理由は、現在支持率の低下に悩む米国のバイデン大統領が、米国民の感情を考慮してムハンマド・ビン皇太子との接触を避けた可能性である。折しもCOP26の直前の一〇月二五日には、ムハンマド皇太子が前国王の殺害を示唆していたというムハンマド・ビン・ナーフ前皇太子の元側近のインタビュ어가米国内でテレビ放映され、現皇太子に対する負のイメージが強まっていた。米国では二〇一八年のトルコにおける米国在住サウジ人記者殺害事件は皇太子に責任があると考えられる者も、依然として多くいる。

そもそもムハンマド皇太子が今年三月以来、グリーン・イニシアティブを掲げて気候変動対策に積極性を示した背景には、バイデン大統領への接近という目的があった。バイデン大統領は上述の記者殺害事件などをめぐり大統領選挙期間中もムハンマド皇太子を非難し、政権発足後も皇太子との直接的な接触を避けてきた。こうした中で、ムハンマド皇太子が気候変動問題を重視する同大統領と接近する目的も込めて推進したのがグリーン・イニシアティブであったが、結局その目論見はCOP26で不発に終わった。

ムハンマド皇太子は今後、二〇六〇年のネットゼロ目標の正統性を国際社会で説明し、同じ目標年を掲げた中国やロシアとも必要に応じて連携するだろう。二〇五〇年目標の設定に躊躇する途上国もまだ多く存在しており、サウジアラビアの立場は決して国際社会において例外的ではない。その一方で、三月以降のグリーン・イニシアティブを米国のケリー気候変動担当特使が評価したことも事実であり、バイデン大統領の関心を引くための手段として、引き続き皇太子はグリーン・イニシアティブを堅持するだろう。来年のエジプト主催のCOP27、再来年のUAE主催のCOP28において、さらにどのような展開が見られるか、同国の動向を注視していきたい。●